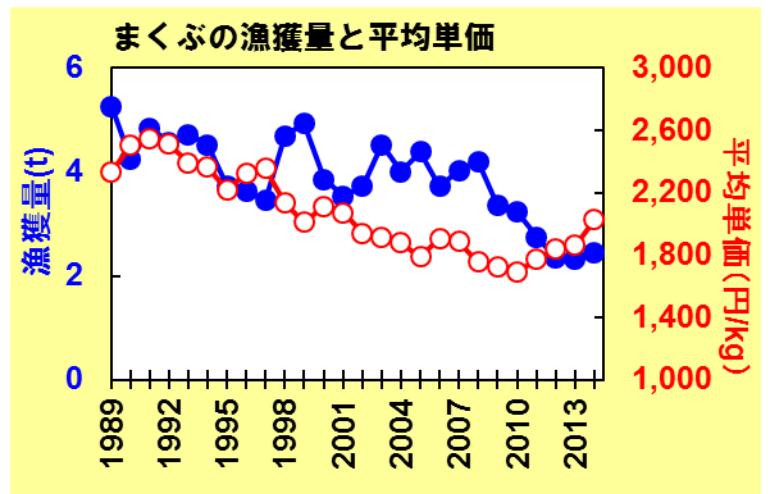


2015年10月1日 発行

水産海洋技術センター石垣支所では、名蔵湾の海草藻場で、いまぐぶ、くちなぎやたまんなど、沿岸漁業で重要な魚種の稚魚の数を継続的に調査しています。今年は、過去のデータと比べ特にいまぐぶが多いようです。

八重山におけるいまぐぶ漁業

いまぐぶは、和名をシロクラベラと言い、太平洋の熱帯から亜熱帯に広く分布している大型のベラ科魚類です。あかじん、あかまちと並んで沖縄三大高級魚として知られ、潜水器漁業の重要な漁獲対象種となっています。八重山では、年間2～5トン程度漁獲されていますが、近年漁獲量が減少傾向にあり、2007年から体長30cm未満の小型魚の漁獲を制限することで、未熟な魚の死亡率を減らし、資源を増やす試みが続けられています。また、近年の平均セリ単価は、2,000円/kg前後で、回復傾向にあります。



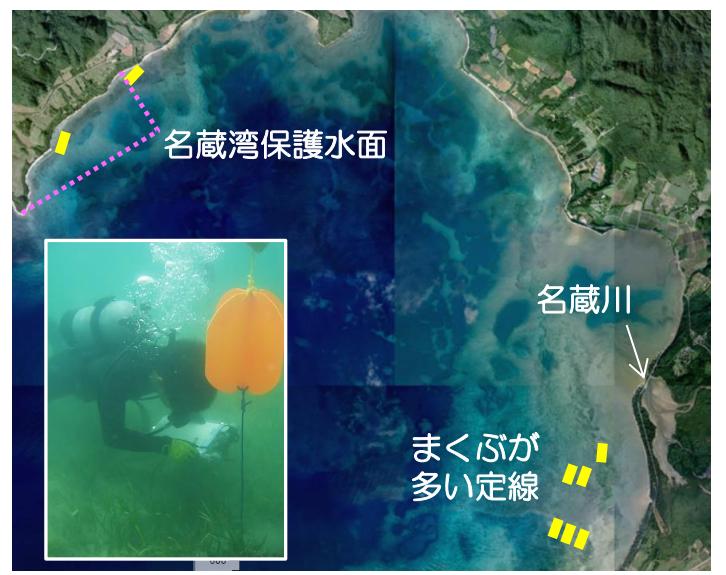
調査のデータ

下のグラフは、2006年から2015年の名蔵湾で調査したいまぐぶの稚魚密度(調査ライン当たりに目撃した数)です。例年、いまぐぶの稚魚は、8つの定線を調査しても、多い月で合計3～15匹(定線(750㎡)あたり0.1～0.9匹)しか出現しませんが、今年の6月は、8つの定線でなんと合計61匹(定線あたり7.6匹)もの稚魚が出現しました。今年は、たまたま生まれた直後の稚魚が生き残りやすい条件が揃ったため、稚魚が多くなったと考えられますが、その条件が何であったかはまだ分かっていません。



野外調査の方法

八重山におけるいまぐぶの産卵期は1～4月ごろと考えられており、孵化した稚魚は、約25日目から体長約20cmになるまで藻場で生活します。当センターでは、藻場で稚魚が観察される5～10月ごろにかけて名蔵湾などの藻場に複数の調査ラインを設け、毎月潜水して目撃した稚魚の数を調査しています。



名蔵湾の調査定線(黄色)と調査の様子

今後、漁獲量が増える?

今年生まれのいまぐぶは、来年の1月頃には20cm(満1歳)に、再来年の1月頃には30cm(満2歳)程度にまで大きくなると考えられます。従って、来年以降、漁場には小型のいまぐぶが多く見られるようになると考えられるとされますので、来年以降の漁では、特に小型魚を獲らないよう注意することが必要です。八重山のいまぐぶは、満2歳頃から卵を産めるようになると考えられていますので、今年生まれたいまぐぶたちは、再来年の産卵期(1～4月頃)から産卵に加わることになるでしょう。産卵する親が増えれば、安定的にいまぐぶ資源が増えていくと考えられますので、いまぐぶ稚魚が増えた今年は、資源を増やすためのチャンスの年です。目で見て獲物を獲るか獲らないか判断する電灯潜り漁にとって、来年は我慢の1年になるかもしれませんが、安定的な漁獲量アップのために、頑張っていきましょう!

